

ワークショップ 自分だけの小屋をつくってみよう

2014年8月30日 埼玉県立近代美術館創作室 / 11月23日「牧禎舎」

今

年のSMFのテーマ“小屋”を考える契機として「ワークショップ 自分だけの小屋をつくってみよう」を県内2ヶ所で実施しました。

1回目の会場「埼玉県立近代美術館」では、抽選で選ばれた16名の子どもたちが参加しました。当日、美術館の創作室には乾いた粘土のかたまりが用意されていて、参加者はまずそのかたまりをくんで粉にするところからはじまりました。「さあ、ボールをいっぱいにして！」との声をきっかけに、みな一心不乱に粘土をくんでいきます。ようやくまとった土の粉に水を加えて粘土になる瞬間には歓声があがりました。午後になると1人20kgの粘土がくばられ、自分で作った粘土も合せて、いよいよ小屋づくりです。いちおう作り方は説明しましたが、参加者はみな自由な技法で制作をすすめていきました。あちこちから楽しいおしゃべりが聞こえてくるので耳をかたむけてみると、ほとんどが自分の未来の家について話していました。最後に簡単な鑑賞会をおこなって、その後の計画を話しました。小屋は10日ほど乾燥させて窯で焼き、テラコッタ作品として9月に開催される〈アート日和@北浦和〉で商店街に展示されることや、その当日には作者による「展示ツアー」を予定していることなどを告げると、創作室はどよめきにつつまれました。(参加:16人)

※〈アート日和@北浦和〉のようすは11ページの記事を参照してください。



2回目は行田市「牧禎舎」を会場に、〈アート日和@行田〉のプログラムとして実施しました。こちらでははじめてに参加者にむけて自身がつくろうと思った小屋の正面顔を描くように投げかけました。絵心が無いから……ととまどう人もいましたが、何とか描いてもらい、顔のカタチをスチレンボードでカットするように指示して制作開始です。その後は、順番に側壁、天井、屋根などのパーツをカットしてゆき、最後に専用の接着剤で組み立てて完成させます。作業がすすむと気持ちが慣れてくるのか、みな装飾にこりはじめました。窓わくに工夫をこらしたり、ドアノブやインターホンをつけたりするなど、どんどん個性が出てきます。最終的に題名などをするししたキャプションをそえてステージに展示し、鑑賞会にのぞみました。鑑賞会でみな異口同音に語るのは、「これが目で、ここが口、そして、これは前髪……」というぐあいに顔の説明でした。全員で記念撮影した後に、それぞれ作品とのツーショットでファインダーにおさまリ、ワークショップは無事終了となりました。(参加:7人)

ワークショップをつうじて印象に残ったのは、完成した小屋がみな作者によく似ているということでした。そもそも今回の取り組みは“自分”と“小屋”という2つの要素をどう融合するかがかかれた課題でしたが、北浦和では“未来の家”、行田では“顔”というキーワードが出てきたことで、それはたちまちにクリアされたように感じています。小屋をテーマとする創作活動の成果が作者の個性を象徴するということは、“小屋”が人の創造性を心の内側から刺激する存在であるということを端的に示しているのではないのでしょうか。

石上城行(SMF運営委員)



多世代交流ワークショップ ハートハウスをつくらう!

2014年9月6日 うらわ美術館ギャラリーD (視聴覚室)

う

らわ美術館の秋のワークショップとして定着した「多世代交流ワークショップ」は、今年で6年目となります。おなじみ小池ちかこさん(臨床美術士)を講師に迎え、今回は「小さな家」をモチーフに、紙粘土と透明なプラ板を使ってランプシェードをつくるワークショップとしました。

集まった参加者はほとんどが初対面のため、最初に風船を使ってコミュニケーションを図りました。質問をしたい人に風船を渡し、風船を受け取った人は質問に答えて次の人に風船を渡すという内容で、参加者の表情が次第に和らいでいきました。そして、その後に「小さな家」づくりとして紙粘土に色を着けていく活動に入りました。ペアで交流しながら、自分の好きな色、今日の色、ペアのイメージ色など、講師の出す質問からイメージする色を紙粘土に水彩絵の具で練り込んでいきます。そのうちの何色かはペアと交換しますが、好きな色やイメージした色は同じでも、紙粘土に着色した色は微妙に違い、数色集まった紙粘土の色合いはそれぞれの参加者の個性を表しているようでした。次に、集まった紙粘土を思いおもいに並べてひも状にのばし、テグスで切り分けていきます。色の並べ方や紙粘土ののばし方によって切り分けた時の紙粘土の表情はさまざま、参加者は夢中になって制作に取り組んでいました。そして、それを1cmほどの幅に切り分けた「紙粘土ビーズ」にしてホットボンドでプラ板に接着していきます。そのプラ板は筒状に丸め、同じく透明なプラ板でつくった円錐状の屋根をつけて「小さな家」のランプシェードの完成です。プラ板が透明なので、遠目に見るとカラフルな「紙粘土ビーズ」が浮いているように見えてとても美しいものになりました。最後に、できあがったランプシェードには、時間と共に色が赤・青・緑の3色に変化していくLEDライトを組み合わせて、参加者全員で点灯式をしました。透明なプラ板や「紙粘土ビーズ」にLEDライトが当たり、刻々と表情を変えるその光に、参加者一同からは歓声があがっていました。

一つひとつの「紙粘土ビーズ」は、自分の好きな色や自分以外の人(今回はペアの人)からみた自分を色で表した集合体でもあり、ある意味でそれ自体が自分自身を表しています。透明な「小さな家」の中に入っている「紙粘土ビーズ」は、さまざまな光に照らされます。日常の中で周囲との多様な関わりや経験を通して生きていく人びと、それを感じさせるランプシェードになりました。(参加:2回計43人)

田島均(SMF運営委員)



あなたと
どこでも
アート
小さな家
プロジェクト